

幼少期の身体接触の量や質と養育者の養育態度との 関連

著者	岩橋 未来, 桂田 恵美子
雑誌名	関西学院大学心理科学研究
巻	49
ページ	5-11
発行年	2023-03-16
URL	http://hdl.handle.net/10236/00030689

幼少期の身体接触の量や質と養育者の養育態度との関連

岩橋 未来*・桂田恵美子**

抄録：本研究の目的は、幼少期の養育者との身体接触の量や質と養育者の養育態度との関連を調べることであった。そのために大学生と養育者を対象に質問紙調査を実施した。両者の結果を総合すると、「受容」、「子ども中心主義」というポジティブな養育態度では身体接触量が多く、子どもは身体接触を快として受け取っていた。一方「接触回避」、「一貫性のないしつけ」というネガティブな養育態度では、身体接触量が少なく、子どもは身体接触を快として受け取っていなかった。また、「過保護」の養育態度では身体接触の量や質との関連が見られなかった。本研究で使用した「過保護」の養育態度尺度は「過保護」を適切に捉え切れていない可能性が高く、尺度を変更して再度検討することが今後の課題として挙げられる。

キーワード：幼少期、身体接触の量、身体接触の質、養育態度

家族や養育者との関わりが中心である幼少期の環境は、人生最初の人間関係であるため、その後の人間関係に大きな影響を及ぼす重要なものであると考える。Bowlby (1988 二本木 訳 1993) の愛着理論では、特定の個人に対して親密な情緒的きずなを結ぶことを人間性の基本的な構成要素と考えている。Bowlby (1969, 1973 黒田 訳 1991) によると、私たちが出来事を知覚し、未来を予測し、自分の行動を計画する際に重要な点は、愛着対象者にどのような反応を期待できるかと、自分自身が自分の愛着対象者にどのように受容されているかを認識していることであり、それは愛着人物と自己についての作業モデル (Working Models) と呼ばれる。愛着対象となりうる幼少期の養育者との関わりは、その後の他者との関係形成の基盤になるものである。

このような幼少期の養育者との関わりを規定するものの一つとして身体接触が挙げられる。幼少期は養育者から抱っこをしてもらったり、頭をなでてもらうたりというような身体接触を多く経験する。子どもにとって、この身体接触は非常に重要で、健全な成長に必要なものである。サルスの代理母実験で有名なアメリカの心理学者ハリリー・ハーローは接触によって得られる安心感が子どもの発達上きわめて重要な変数であることを述べている (Blum, 2002 藤澤・藤澤 訳 2014)。

日本における研究においても、幼少期の身体接触と子どもの発達に関するものがある。大学生を対象とした原田・桂田 (2021) の研究では、幼少期の身体接触が多いほど、現在の接触抵抗感が低く、主要な養育者に対する愛着が安定していることが示された。18歳以上の男女を対象とした山口他 (2000) の研究でも、女性のみであ

るが、不安とうつが高い臨床群より健常群の方が幼少期の両親からの身体接触量を多く報告しており、これまでの親からの身体接触と現在の心理的適応の関連が示唆された。また、山口他 (2000) では、身体接触の発達の变化と親の養育態度の関連も検討しており、どの年齢水準でも「甘やかし型」の養育態度では身体接触量が多く、「独裁型」では少なかった。このことから、親の養育態度によって子どもへの身体接触量が異なることも分かった。幼少期の親子の身体接触は毎日の養育を通して行われることから、幼少期の養育者との身体接触を明らかにするためには、養育者の養育態度についても調査する必要があると考える。

幼児をもつ母親を対象とした戸田 (2006) の研究では、「過保護型」「甘やかし型」の養育態度は子どもの自己主張や思いやり行動にマイナスの影響を与えていることが示された。ここで言う「過保護」とは、親自身の関心の範囲内で子どもの行動を制限している養育態度としていた。また、回顧法を用いて幼少期の両親の養育態度を測定し、現在の大学生の自尊心や生き方志向との関連について検討した山下他 (2010) の研究では、愛情・共感が高い養育態度だけでなく、過保護になりすぎない養育態度が自尊心や積極的な生き方志向を促進することが示された。この研究における「過保護」の定義は過剰な保護や心配であり、山口他 (2000) で示された「甘やかし」と共通する部分があると考えられる。

このように、養育者の養育態度は幼児期、そして青年期の子どもの心に影響を与えていることが明らかになっている。養育態度の中でも特に「過保護」や「甘やかし」の養育態度は子どもの自己主張や青年の自尊心、生き方志

*関西学院大学文学部総合心理科学科4年

**関西学院大学文学部教授

向にマイナスの影響を与えていた。しかし、山口他(2000)の研究で「甘やかし」の養育態度で身体接触量が多かったという結果から、「過保護」の養育態度でも、身体接触の量が多いのではないかと考える。それにもかかわらず子どもに悪影響を及ぼす可能性があることから、身体接触の量だけでなく、身体接触の質についても検討する必要があると考える。

これまでの身体接触と養育態度の研究では、身体接触を受けた子ども側だけ、あるいは、養育を行う側だけからの回答を分析したものが多く、客観性に欠けると思われる。そこで本研究では、子ども(大学生)とその養育者の両方に質問紙調査を行い、身体接触の量や養育態度について同じ内容を聞くことにより、それぞれの回答者内での関連だけでなく、養育者と子どもの回答に関連があるのかを分析する。また、先行研究では、養育者を親に限定して調査するものが多かったが、祖父や祖母が幼少期に最も親密な養育者であった可能性もあるため、本研究では幼少期に最も親密だった養育者を子どもに回答してもらい、その養育者に回答を求める形式とする。そして、身体接触の質については、触れられた側がどう捉えるかによって規定されると考えるため、子どもである大学生を対象に、当時の身体接触を主観的にどう捉えていたか、感じていたかについて問うことにした。

本研究では、子どもである大学生と養育者を対象に身体接触の量と質を調査した上で、養育者の養育態度と身体接触との関連を調査することを目的としている。養育態度と身体接触との関連では、ポジティブな養育態度は身体接触の量が多く、質の面でも高いと予測する。一方、ネガティブな養育態度は身体接触量が少なく、質の面でも低いと予測し、過保護傾向の養育態度は、身体接触の量は多いが、質の面では低いと予測する。本研究での過保護傾向とは、戸田(2006)での定義や山下他(2010)での質問内容を参考にし、養育者が自分の関心の範囲内で子どもの行動を制限することと定義した。

方 法

調査参加者 本研究の調査参加者は、日本の大学に通う大学生188名と、その大学生が幼少期に最も親密だったと考えられる養育者106名だった。そのうち、回答の不備がある者を除いた大学生170名(男性43名、女性121名、不明6名)と養育者96名(男性4名、女性92名)を分析対象とした。大学生の平均年齢は20.00歳(SD=1.30, 範囲:18-23歳)で、養育者の平均年齢は51.87歳(SD=4.95, 範囲:44-79歳)であった。

質問紙 大学生用のものは、基本的属性を問うフェイスシートと幼少期に最も親密だった養育者を問う設問、「スキンシップ尺度」、「養育態度尺度」から構成されて

いた。養育者用のものは、基本的属性を問うフェイスシートと「スキンシップ尺度」、「養育態度尺度」から構成されていた。

フェイスシート 基本属性として、大学生用では、生年月日、苗字の頭文字、年齢、性別を尋ねた。このうち、生年月日と苗字の頭文字は養育者との紐づけに利用した。養育者用では、大学生の生年月日、大学生の苗字の頭文字、養育者の年齢、養育者の性別、大学生との関係を尋ねた。

スキンシップ尺度 大学生と養育者共通で、幼少期(小学校入学前)の身体接触量を測定するためにKatsurada(2012)が作成したスキンシップ尺度を使用した。この尺度は、「一緒にお風呂に入る」、「頬ずりをする」などの養育者が日々の生活の中で、子どもである幼児とどの程度スキンシップをしているかを問う計12項目から構成されていた。原田・桂田(2022)で使用されたように、幼少期に最も親密であった養育者のスキンシップについて、幼少期を想起させるように設問の表現を過去形に書き換え(例:「着替えを手伝う」から「着替えを手伝った」)、大学生への質問項目は受動態に変更し(例:「着替えを手伝った」から「着替えを手伝ってもらった」)、回答させた。幼少期の生活で、どの程度スキンシップをしていたかを「全くしていなかった(1)」「かなりあった(4)」の4件法で回答を求めた。得点が高いほど幼少期の身体接触量が多いことを示す。本研究でのこの尺度の信頼性は、Cronbachの α 係数が大学生では.88、養育者では.81であった。また、大学生にのみ、スキンシップ尺度の各質問項目について、どの程度好悪を感じていたかを「嫌いだった(1)」「好きだった(4)」の4件法で回答してもらった。得点が高いほど身体接触について快を感じていたことを示した。本研究での好悪感の信頼性は、Cronbachの α 係数が.92であった。

養育態度尺度 大学生と養育者共通で、養育者の養育態度を分類するために、10下位尺度50項目から成る鈴木他(1985)が作成した尺度を用いた。鈴木他(1985)で行われた10下位尺度の因子分析によって3つの第2次因子が確認された(第1因子=2下位尺度、第2因子=4下位尺度、第3因子=4下位尺度)。本研究では、戸田(2006)と堀他(2002)を参考に、3つの第2次因子の各因子から、2下位尺度ずつ選出し、6下位尺度30項目を使用した。「うちで子どもと楽しい時間を過ごす」などの「受容」、「わたしの全生活は、子どもを中心に動いている」などの「子ども中心主義」、「子どもには、できるだけわたしの考えどおりにさせたい」などの「敵意の含まれた統制」、「子どもが外から時間どおり帰ってくるようにいつもさせている」などの「統制」、「子どものために作ったきまりを、よく変える」などの「一貫性の

ないしつけ」,「子どもとあまり話をしない方だ」などの「接触回避」の各下位尺度から5項目で計30項目であった。それぞれの質問について、幼少期の主要な養育者の行動や態度に対して当てはまる程度について、「全く当てはまらない(1)」から「非常によく当てはまる(5)」の5件法で回答してもらった。子どもの幼少期を想起できるように設問の表現を過去形に書き換え(例:「子どもにたびたび話しかける」から「子どもにたびたび話しかけた」),大学生への質問項目は、主語として「養育者は(が)」を追加し、養育を受ける側の表現に変更した(例:「子どもにたびたび話しかけた」から「養育者はあなたにたびたび話しかけた」)。本研究でのこの尺度の信頼性は、Cronbachの α 係数が大学生の尺度全体で.90で、「受容」では.78,「子ども中心主義」では.76,「統制」では.79,「接触回避」では.68,「一貫性のないしつけ」では.63,「敵意の含まれた統制」では.76であった。また、養育者の尺度全体は.82で、「受容」では.62,「子ども中心主義」では.79,「統制」では.65,「接触回避」では.59,「敵意の含まれた統制」では.75であった。本研究では、「子どもに、自分で物事を決めさせることはあまりない」等の質問項目がある、「敵意の含まれた統制」が本研究での過保護の定義に最も近いと考え、この下位尺度の合計点を「過保護」得点とした。

手続き 本研究は、2022年8月から11月の間に実施した。大学生には、大学の授業の一部の時間を使って質問紙を配布し、その場で回収した。また一部の参加者においては、Googleフォームを用いたオンライン調査で回答を回収した。そして、養育者にはGoogleフォームを用いたオンライン調査で回答を回収した。

分析方法 データの処理や分析は、Excel用フリー統計ソフトHAD17_105(清水,2016)を用いて行った。

結 果

幼少期の身体接触について、まず、親密だった養育者を大学生に尋ねたところ、162名が母親、5名が父親、2名が祖母、1名が祖父という回答だった。また、大学生の回答内の相関分析は170名、養育者の回答内の相関分析は96名、大学生と養育者の回答の相関分析は96組が分析対象となった。

(1) 幼少期の身体接触量と質の関連および身体接触量と養育態度の養育者と子どもの間の関連

身体接触量と身体接触の好悪感について、関連があるのを見るために、相関分析を行ったところ、大学生が回答した身体接触量と大学生が回答した身体接触の好悪感

との間に有意な比較的強い正の相関が見られた($r=.64, p<.01$)。また、養育者が回答した身体接触量と大学生が回答した身体接触の好悪感との間にも有意な弱い正の相関が見られた($r=.21, p<.05$)。

身体接触量と養育態度において、養育者と大学生の回答に結びつきがあるか調べるために、相関分析を行った。その結果、身体接触量において有意な弱い正の相関($r=.35, p<.01$)、養育態度においては「子ども中心主義」、「接触回避」、「一貫性のないしつけ」で有意傾向の弱い正の相関(子ども中心主義: $r=.19, p<.10$;接触回避: $r=.20, p<.10$;一貫性のないしつけ: $r=.20, p<.10$)、「受容」、「統制」では有意な弱い正の相関(受容: $r=.24, p<.05$;統制: $r=.36, p<.01$)、「敵意の含まれた統制」では有意な比較的強い正の相関が見られた($r=.45, p<.01$)。

(2) 幼少期の身体接触と養育態度の関連

まず、大学生が回答した幼少期の身体接触量と大学生が回答した養育態度の関連を調べるために、身体接触の好悪感得点を統制変数として偏相関分析を行ったところ、大学生が回答した身体接触量と養育態度の全ての下位尺度との間に有意な相関が見られなかった。

また、大学生が回答した身体接触量と養育者が回答した養育態度との間に関連があるかを調べるために同様の偏相関分析を行ったところ、大学生が回答した身体接触量と養育者が回答した「接触回避」との間に有意な弱い負の相関が見られ($r=-.22, p<.05$)、他の養育態度との間には有意な相関が見られなかった。

次に、養育者が回答した幼少期の身体接触量と養育者が回答した養育態度の関連を調べるために、相関分析を行ったところ、養育者が回答した身体接触量と「受容」との間に有意な比較的強い正の相関、「子ども中心主義」との間に有意な弱い正の相関が見られ(受容: $r=.42, p<.01$;子ども中心主義: $r=.36, p<.01$)、他の養育態度とは有意な相関が見られなかった。また、養育者が回答した身体接触量と大学生が回答した養育態度との間に関連があるかを調べるために相関分析を行ったところ、養育態度の全ての下位尺度との間に有意な相関が見られなかった。

次に、大学生が回答した身体接触の好悪感と大学生が回答した養育態度との関連を調べるために、身体接触量得点を統制変数として偏相関分析を行ったところ、身体接触の好悪感と「受容」、「子ども中心主義」との間に有意な弱い正の相関が見られ(受容: $r=.35, p<.01$;子ども中心主義: $r=.28, p<.01$)、「接触回避」との間に有意な弱い負の相関が見られ($r=-.20, p<.01$)、「一貫性のないしつけ」との間に有意傾向の弱い負の相関が見られたが($r=-.15, p<.10$)、「統制」、「敵意の含まれた

Table 1 大学生／養育者が回答した幼少期の身体接触量，大学生が回答した身体接触の好悪感と大学生／養育者が回答した幼少期の養育態度との相関・偏相関係数

		身体接触量		身体接触の好悪感
		大学生	養育者	大学生
受容	大学生	0.10	0.07	0.35**
	養育者	0.10	0.42**	-0.06
子ども中心主義	大学生	0.07	0.05	0.28**
	養育者	0.12	0.36**	-0.16
統制	大学生	0.08	0.13	-0.09
	養育者	-0.12	0.09	0.18+
接触回避	大学生	-0.12	-0.00	-0.20**
	養育者	-0.22*	-0.07	0.16
一貫性のないしつけ	大学生	-0.00	0.05	-0.15+
	養育者	-0.08	0.01	0.01
敵意の含まれた統制	大学生	-0.08	0.15	-0.12
	養育者	0.06	0.07	0.04

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

統制」との間には有意な相関が見られなかった。

また、大学生が回答した身体接触の好悪感と養育者が回答した養育態度との間に関連があるかを調べるために、同様の偏相関分析を行ったところ、大学生が回答した身体接触の好悪感と養育者が回答した「統制」との間には有意傾向の弱い正の相関が見られ ($r = .18, p < .10$)、他の養育態度の下位尺度との間には有意な相関が見られなかった。

以上の養育者と大学生の身体接触と養育態度との相関・偏相関分析の結果を Table 1 にまとめた。

(3) 幼少期の身体接触の質・量の組み合わせによる養育態度の分析

大学生が回答した身体接触量と身体接触好悪感を、中央値を基準として2分類し、その組み合わせから、「身体接触少嫌群」、「身体接触少好群」、「身体接触多嫌群」、「身体接触多好群」の4群を作成した。そして、養育態度において4群間に違いがあるのかを調べるために、養育態度の下位尺度を従属変数、身体接触の4群を独立変数とした1要因の分散分析を行った。その結果、「受容」、「子ども中心主義」、「接触回避」、「一貫性のないしつけ」で、群の主効果が有意であった(受容: $F(3,166) = 10.64, p < .01, \eta^2 = .16$; 子ども中心主義: $F(3,166) = 9.52, p < .01, \eta^2 = .15$; 接触回避: $F(3,166) = 6.39, p < .01, \eta^2 = .10$; 一貫性のないしつけ: $F(3,166) = 2.91, p < .05, \eta^2 = .05$)。「受容」での多重比較の結果を Figure 1 に示した。Figure 1 が示すように、身体接触少好群が身体接触少嫌群よりも受容得点が有意に高く ($t(166) = -2.64, p < .05$)、身体接触多好群が身体接触少嫌群よりも受容得点が有意に高く ($t(166) = -5.58, p < .01$)、身体接触多好群が身体接触多嫌群よりも受容得点が有意に高かった ($t(166) = -2.59, p < .05$)。「子ど

も中心主義」での多重比較を行った結果を Figure 2 に示した。Figure 2 が示すように、身体接触少好群が身体接触少嫌群より子ども中心主義得点が有意に高く ($t(166) = -2.88, p < .05$)、身体接触多好群が身体接触少嫌群より子ども中心主義得点が有意に高かった ($t(166) = -5.27, p < .01$)。「接触回避」での多重比較を行った結果を Figure 3 に示した。Figure 3 が示すように、身体接触多好群が身体接触少嫌群よりも接触回避得点が有意に低かった ($t(166) = 4.30, p < .01$)。「一貫性のないしつけ」での多重比較を行った結果を Figure 4 に示した。Figure 4 が示すように、身体接触多好群が身体接触少嫌群よりも一貫性のないしつけ得点が有意に低かった ($t(166) = 2.75, p < .05$)。そして、「統制」と「敵意の含まれた統制」では、身体接触群の主効果は有意ではなかった(統制: $F(3,166) = 0.65, n.s.$ 敵意の含まれた統制: $F(3,166) = 0.98, n.s.$)。

次に、養育者が回答した養育態度に身体接触の質と量の組み合わせ4群の違いがあるかを調べるために、各養育態度を従属変数、身体接触の4群を独立変数とした1要因の分散分析を行った。その結果、「統制」において群の主効果が有意傾向であった ($F(3,92) = 2.32, p < .10, \eta^2 = .07$) が、多重比較の結果、4分類間の有意差はみられなかった。また、「接触回避」においても群の主効果が有意であった ($F(3,92) = 5.19, p < .01, \eta^2 = .15$)。多重比較を行った結果、身体接触少好群は身体接触多嫌群 ($t(92) = 3.64, p < .01$) や身体接触多好群 ($t(92) = 3.22, p < .01$) よりも養育者が回答した接触回避得点が高かった (Figure 5 参照)。「受容」、「子ども中心主義」、「一貫性のないしつけ」、「敵意の含まれた統制」では、身体接触群の主効果は有意ではなかった(受容: $F(3,92) = 1.56, n.s.$; 子ども中心主義: $F(3,92) = 1.98, n.s.$; 一貫性のないしつけ: $F(3,92) = 0.54, n.s.$; 敵意の

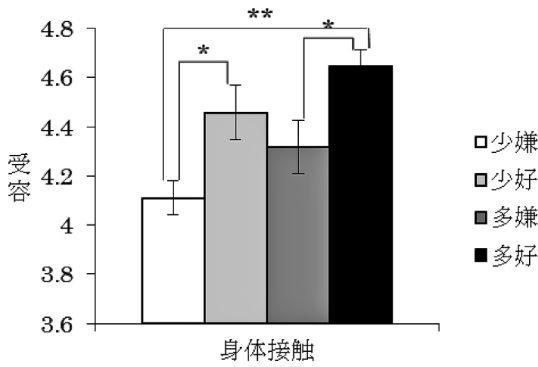


Figure 1 大学生が回答した受容得点における身体接触量と好悪感の組み合わせ群 (少嫌群・少好群・多嫌群・多好群) の差
注) エラーバーは標準誤差を示す。
 $**p < .05$, $**p < .01$

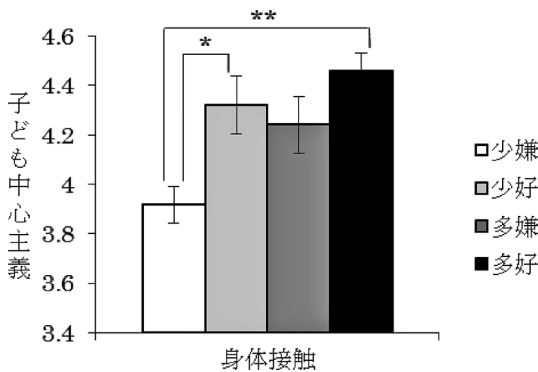


Figure 2 大学生が回答した子ども中心主義得点における身体接触量と好悪感の組み合わせ群 (少嫌群・少好群・多嫌群・多好群) の差
注) エラーバーは標準誤差を示す。
 $**p < .05$, $**p < .01$

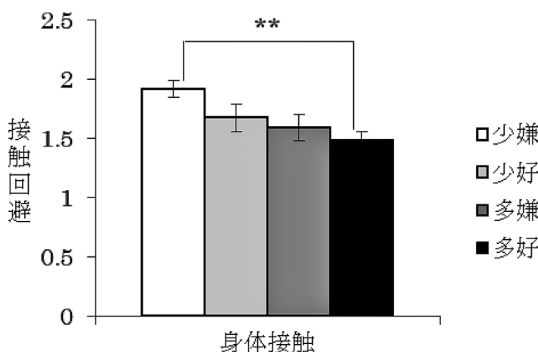


Figure 3 大学生が回答した接触回避得点における身体接触量と好悪感の組み合わせ群 (少嫌群・少好群・多嫌群・多好群) の差
注) エラーバーは標準誤差を示す。
 $**p < .01$

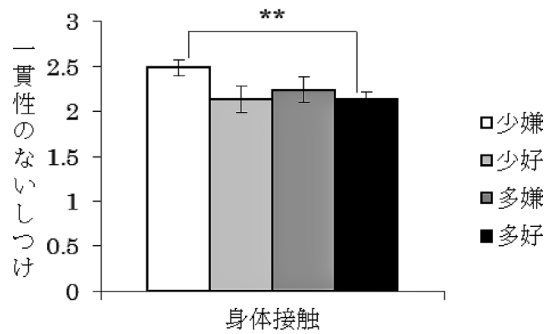


Figure 4 大学生が回答した一貫性のないしつけ得点における身体接触量と好悪感の組み合わせ群 (少嫌群・少好群・多嫌群・多好群) の差
注) エラーバーは標準誤差を示す。
 $**p < .01$

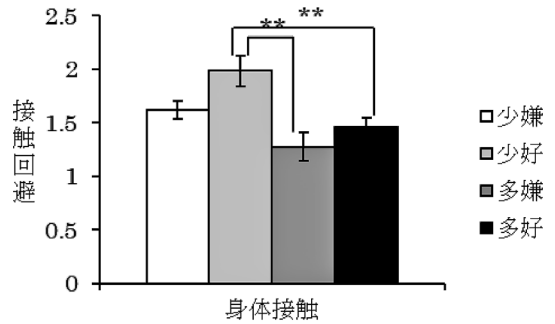


Figure 5 養育者が回答した接触回避得点における大学生が回答した身体接触量と好悪感の組み合わせ群 (少嫌群・少好群・多嫌群・多好群) の差
注) エラーバーは標準誤差を示す。
 $**p < .01$

含まれた統制: $F(3,92) = 0.68, n.s.$ 。

考 察

本研究の目的は、幼少期の養育者との身体接触と養育者の養育態度との関連を調査することであった。そのため、大学生に幼少期(就学前)における養育者の養育態度や、養育者からの身体接触について質問した。身体接触に関しては、量だけでなく、それを快と感じていたかという質の面も測定した。また、身体接触と養育態度の関連の客観性を見るために、養育者側からも身体接触量と養育態度を測定した。そして、結果の予測は以下の通りであった。「受容」、「子ども中心主義」というポジティブな養育態度では身体接触量が多く、子どもも身体接触を快と捉え、一方、「接触回避」、「一貫性のないしつけ」というネガティブな養育態度では、身体接触量が少なく、子どもも身体接触を快と受け取っていないだろうと予測した。また、「過保護」の養育態度では、身体接触量は

多いが、子どもは身体接触を快と受け取っていないだろうと予測した。本研究では、鈴木他（1985）の「敵意の含まれた統制」の下位尺度を過保護の養育態度とした。

まず、幼少期の身体接触量と養育態度の関連では、身体接触量と「受容」、「子ども中心主義」との間に正の相関が見られた。この相関は養育者のデータでのみ確認された。また、大学生が回答した身体接触量と養育者が回答した養育態度では、「接触回避」との間には負の相関が見られた。幼少期の身体接触の好悪感と養育態度の関連では、大学生が回答したデータでのみ「受容」、「子ども中心主義」との間に正の相関、「接触回避」、「一貫性のないしつけ」との間で負の相関が見られた。養育者が回答したデータでは、「統制」との間に正の相関が見られた。身体接触の量と質の組み合わせの分類による分散分析では、身体接触多好群が身体接触少嫌群や身体接触多嫌群より「受容」の得点が高く、身体接触多好群が身体接触少嫌群よりも「子ども中心主義」の得点が高く、「接触回避」、「一貫性のないしつけ」の得点が低かった。これらは大学生が回答した養育態度との間のみ確認された。また、養育者の回答した養育態度では、身体接触多好群や身体接触多嫌群は身体接触少好群よりも「接触回避」の得点が低かった。

大学生の回答あるいは養育者の回答から得られた結果を総合すると、「受容」、「子ども中心主義」などのポジティブな養育態度では身体接触量が多く、子どももそれを快と捉えており、「接触回避」のネガティブな養育態度では身体接触量は少なく、それを快と捉えていないという結果が見られたことは、本研究の結果の予測に沿ったものであった。また、身体接触の量と質の組み合わせによる分析においても同様の結果が示され、更に「一貫性のないしつけ」の養育態度においては好悪感においてのみ予測に沿った結果であった。大学生の回答では、身体接触の量と質は比較的高い相関があったため、偏相関分析をおこなった。その結果、身体接触量と養育態度との関連は示されなかったが、身体接触の好悪感（質）と養育態度の関連が示されことから、子どもにとっては身体接触量と言うより質の方が養育者の養育態度とより明確に結びついていると解釈できる。これまでの研究では、養育態度と身体接触量との関連は見られていたが、身体接触の質との関連は検討されていなかった。実際、山口他（2000）では、身体接触の質を検討することが今後の展望として述べられていた。本研究で身体接触量より質との関連が明確に示されたことは意義深いと思われる。

しかし、養育者の回答した養育態度の「統制」と大学生の回答した身体接触の好悪感との正の相関、すなわち、統制が高いほど身体接触を快と感じていたという結果は我々の予測（身体接触量や質とは負の相関を示す）

とは反するものであった。「統制」はネガティブな養育態度と捉えての予測であった。しかし、「統制」の質問項目を見ると「子どものした悪いことは、みな、何かの形で罰を与えるべきだと思う」などの厳しいしつけとも捉えられる面もある。また、この下位尺度の平均値は5段階評価の2.52であったことから、ほとんどの養育者は中程度の統制を行っており、そのため子どもにそれほどネガティブな養育態度としては受け取られていなかった可能性がある。

本研究では、過保護の養育態度では身体接触量は多いが、子どもはそれを快と受け取っていないという予測を立てた。しかし、過保護の養育態度とした「敵意の含まれた統制」の下位尺度では身体接触との関連は一切見られず、予測に反していた。その原因としては過保護の養育態度として「敵意の含まれた統制」を選択したことにあると考える。戸田（2006）の定義や山下他（2010）の質問内容を参考にして、「養育者が自分の関心の範囲内で子どもの行動を制限すること」を本研究での過保護の定義とし、鈴木他（1985）の養育態度尺度の下位尺度の中で「敵意の含まれた統制」がこの定義に近いと考え、この下位尺度得点を「過保護」の養育態度とした。しかし、山下他（2010）が定義している過剰な保護や、過剰な心配などの要素や山口他（2000）で示された「甘やかし」の要素は含まれておらず、その結果、関連が見られなかったと考える。今後は、「過保護」の養育態度の尺度を精査し、より適切な尺度で検討する必要がある。

本研究では、子どもである大学生とその養育者からデータを収集し、身体接触量や養育態度において大学生と養育者の間に弱いながらも正の相関が見られたため、養育者と大学生である子どもは幼少期の身体接触や養育態度について、比較的同じように認知していることが分かった。にもかかわらず、身体接触と養育態度の関連では大学生と養育者のクロス相関はあまり認められなかった。つまり、身体接触量や質と養育態度の関連は子ども内あるいは養育者内の主観的な関連であると言える。その中で、クロス相関が見られた大学生である子どもが報告した身体接触と養育者の報告した養育態度（「統制」、「接触回避」）の関連は子どもが養育者の養育をしっかりと受け取っていることを表し、より客観的なつながりであると言える。

本研究の限界点は、大学生の子どもとその養育者に幼少期のころの身体接触や養育態度を回顧法で回答してもらった点である。大学生にとっても、その養育者にとっても幼少期（就学前）はかなり昔のことであり、その情報はあくまでも現在の時点での思い出によるものであるため、正確性に欠ける点である。今後は、実際に幼児を子育て中の親に身体接触量と養育態度を聞き、その子ど

もには、身体接触の好悪感を聞くなどとする方法で、その関連性を確かめる必要がある。

引用文献

- Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss, Vol.1, Attachment*. London: The Hogarth Press. (ボウルビィ, J. 黒田実郎 (訳) (1991). 母子関係の理論Ⅰ 愛着行動 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and Loss, Vol.2, Separation: Anxiety and anger*. London: The Hogarth Press. (ボウルビィ, J. 黒田実郎 (訳) (1991). 母子関係の理論Ⅱ 分離不安 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1988). *A secure base: clinical applications of attachment theory*. London: Tavistock/Routledge. (ボウルビィ, J. 二木 武 (監訳) (1993). 母と子のアタッチメント: 心の安全基地 医歯薬出版株式会社)
- Blum D. (2002). *Love at Goon Park: Harry Harlow and the science of affection*. Basic Books. (ブラム, D. 藤澤隆史・藤澤玲子 (訳) (2014). 愛を科学で測った男: 異端の心理学者ハリー・ハーローとサル実験の真実 白揚社)
- 原田萌・桂田恵美子 (2022). 幼少期の身体接触経験と現在の接触抵抗感や愛着との関連 関西学院大学心理科学研究, 48, 43-48.
- 堀 妙子・奈良間美保・山内尚子 (2002) 学童期の二分脊椎症児の母親の養育態度と健康管理への関わりについて 日本小児看護学会誌, 11, 1-7.
- Katsurada, E. (2012). The relationship between parental physical affection and child physical aggression among Japanese preschoolers. *Child Studies in Diverse Contexts*, 2(1), 1-10.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD——機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案—— メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 鈴木真雄・松田 惺・永田忠夫・植村勝彦 (1985). 子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家族環境・社会ストレスに関する測定尺度構成 愛知教育大学研究報告, 34, 139-152.
- 戸田須恵子 (2006). 母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係について 釧路論集: 北海道教育大学釧路校研究紀要, 38, 59-69.
- 山口 創・山本晴義・春木 豊 (2000). 両親から受けた身体接触と心理的不適応との関連 健康心理学研究, 13, 19-28.
- 山下美実子・石 暁玲・桂田恵美子 (2010). 大学生の親子関係・自尊感情・生き方志向と子ども時代の両親の養育態度との関連: 過保護という養育態度の検討 臨床教育心理学研究, 36, 21-26.